

富山市方言における主語・目的語標示と主題標示

小西いずみ (広島大学)

ikonishi@hiroshima-u.ac.jp

1. はじめに

富山市方言では、自動詞文の主語、他動詞文の主語、他動詞文の目的語がいずれも \emptyset (無助詞) で表される。焦点句であれば主語にカ[°]、目的語にオを用いやすくなるが、その場合も \emptyset が適格・自然である。

- (1) キョー アメ { \emptyset /??カ[°]} フルヨ。 カサ { \emptyset /??オ} モッテカレ。
(今日は雨が降るよ。傘を持って行きなさい。)
- (2) ダレ { \emptyset /カ[°]} サラ { \emptyset /??オ} ワッタカ[°]。(誰が皿を割ったの?)
- (3) アシタ ナニ { \emptyset /オ} モッテカンナンカ[°]。
(明日、何を持って行かなければならないの。)

主語にはアも用いられる。

- (4) A: ドーシタカ[°]。(どうしたの?)
B: ユッキヤ フッテキタカ[°] (雪が降ってきたんだ。)

アは単独で音節を成さず、次のように実現する (小西 2016: 103-14, 113)。

前接/N/ ナ 例) ホンナ (本が)

前接/i/ 前接拍と融合して/Cja/。前節拍が無声子音の場合は、/QCja/となることもある。

例) ユキヤ・ユッキヤ (雪が)

前接/e/ 前接拍と1音節をなして[a] (片仮名で「ア」と表記)、または、前接拍と融合して/Cja/。例) ミセア・ミシヤ (店が)

前接/u、 o/ 前節拍と1音節をなして[a]。例) ヒトア (人が)

上のうち、前接/e、 u、 o、 および、前節/i/の環境での/Cja/形は、カ[°] やワのぞんざいな発話スタイルにおける臨時の音声的変異とみなせるもので、内省では許容しにくい。前接/i/の/Qcja/や前接/N/のナは内省でも可と判断される¹。

名詞句が〈感情・欲求の対象〉や〈通路〉を表す場合も \emptyset がふつうで、それぞれ焦点が

¹ ナは撥音前接環境以外でも稀に現れるが。アの異形態ナが析出された新しい形だと思われる。話者が意識しにくい形であるため、以下では対象としない。

あればカ° やオをとりうる。共通語の二重主格文に対応してøが二重に現れる。

- (5) アンタ ø ナニ {ø/カ°} ノミタイ。(あなたは何が飲みたい?)
(6) ドコ {ø/オ} トーッテキタカ°。(どこを通って来たの?)
(7) ダレ ø イチバン セーø タカイカネ。(誰が一番背が高いかな。)

移動の着点を表す無生名詞句もøになりうる。この場合は焦点の有無によらず、ニでもøでも自然に感じられる。有生名詞句ではøが不可。

- (8) ゴミ チャント ゴミバコø イレラレ。(ゴミはちゃんとゴミ箱に入れなさい。)
(9) a. タローø ハナコ {ニ/*ø} ホンø ヤッタ。
(太郎が花子 {に/*ø} 本をやった。)
b. タローø ハナコノ ガッコウ {ニ/ø} ホンø ヤッタ。
(太郎が花子の学校 {に/??ø} 本をやった。)

さらに次のような文も可能。(10)は他動詞使役文で〈動作主=被使役者〉と〈対象〉がø、(11)は移動の〈対象〉と〈経路〉がø、(12)は対象にあたる二つの名詞句〈被影響物〉と〈目標部位〉がøとなる文である。(13)は〈対象〉二つとも、〈着点〉と〈対象〉とも解釈しうるが、これもともにøとなる。

- (10) ナラ ダレø エダø 切ラセル? (じゃあ、誰に枝を切らせる?)
(11) コノ クルマデ ナテ アノクルマø モンø トーシトイテマ。
(?この車じゃなくて、あの車を門を通しておいてよ。)
(12) キンノ ダッカø ウチノマドø ガラスø ワツタカ° ヨ。
(昨日誰かがうちの窓 {*/ø/の} ガラスを割ったんだよ。)
(13) サキニ アノカベ {ø/ニ} ペンキø ヌラレ。
(先にあの壁 {*/ø/に} ペンキを塗りなさい。)

こうしたデータに対し、小西(2015b)は次のように述べた。

- 1) 富山市方言の基本的な格パターンは、次のいずれにも解釈しうる。
(a) 対格型 (S・Aが同一、Oが別)。主格にはø・カ°、対格にはø・オの変異があり、焦点の明示という情報構造上の動機によりそれぞれカ°・オが選択される。
(b) 中立型 (S・A・Oが全てø) と対格型 (S・Aがカ°、Oがオ) が併存。基本は中立型だが、焦点の明示という情報構造上の動機により対格型がかぶさる。
2) 上の(a)の立場においては、富山市方言は、二つあるいは一方をø標示とすることにより、二重対格構文を許すことになる。(b)の立場においては、共通語の「二重主格」相当の文も「二重対格」相当の文も、「中立格」が二重・三重に重複する構文として実

現可能だということになる。

- 3) 共通語においては、主題以外の名詞句の \emptyset 標示は、述語の直前では許容しやすいが、述語から離れると許容しにくくなるとされる(丹羽 1989、庵 1998、杉本 2000 など)。富山市方言の場合、 \emptyset の出現環境は意味役割の対応から見ると共通語の \emptyset と大きく変わらないが、述語からの距離の制約を持たないために、節内の複数の名詞句が \emptyset となることを許し、全体として \emptyset の頻度も高くなったと言える。さらに、対象を二つとる構文や、対象と通路をとる構文が可能なのも、 \emptyset 標示に述語からの距離の制約がないからこそである。

本発表では、上の議論で十分に検討できなかった次の問題について扱う。

- 4) 富山市方言の主語(主格)・目的語(対格)標示の定量的把握：目的語(対格)については談話資料の用例調査結果から \emptyset が圧倒的に多いことを示したが(小西 2016: 105)、主語(主格)における \emptyset 、ア、カ^o の頻度差は不明である。
- 5) 格と情報構造の関係の問題：小西(2015b、2016)において富山市方言の格を記述・考察する際は、文全体に焦点がある場合、当該名詞句に焦点がある文を扱い、主語・目的語が前提句の場合(文の「主題」にあたる場合)を除外した。富山市方言では、前提句が \emptyset となることも多く、また、主格と同形のアもとりうる。そのほかにワ、独自に発達させた提題形式チャ(「ト+ワ」由来)、ノコトア(「連体ノ+コト+ワ」由来)もある。特に主語の \emptyset 、アは、共通語の「が」に相当する場合、「は」に相当する場合があることになるが、「が」に対応すれば「主格」、「は」に対応すれば「主題」という記述が妥当とは思えない。

以下では、4) を 2 節、5) を 3 節で扱う。

2. 主語・目的語標示の定量的な把握

次の資料を用いる。小西(2016: 第3章)が「藤木資料」としたもの。

富山県教育委員会編「昭和 56 年度富山県方言収集緊急調査 富山地区 正」(未公刊、国立国語研究所所蔵)のうち、「むかしの遊び・むかしの農村」と題された部分の談話の音声(約 34 分間)と文字化資料。調査および文字化担当者は水野元雄。地点：富山市藤木(ふじのき)。富山市東南部に位置する。収録年：1981 年。話者：同地生育の 1916~1917(大正 5~6)年生まれの男女 3 名と、司会として立山町出身の 1920(大正 9)年生まれ男性 1 名。ここでは司会者の発話は対象としない。用例の引用に際し、音声データを確認して改めた場合がある。共通語訳はおよそ原資料に則るが、私に改めた場合がある。

談話資料を用いた定量的な把握は、格標示の方言間対照に有効だと思われるが、実際に

行ってみると、情報構造の標識との関係をどう扱うかに悩む。「格助詞の \emptyset (無助詞) 化」という観点から定量的な記述・分析を行う先行研究では、主語・目的語の「Nワ」「Nモ」「Nシカ」などを対象外としていると思われるが、その場合、「Nナンカ」「Nダケ」などをどのように扱ったのかが不明である²。「(共通語の) $\bigcirc\bigcirc$ 格相当のバリエーション」というテーマ設定で共通語訳を基準として「が」「を」と訳せる(実際に第3者がそう訳している)例を対象とするのも一つの方法だが、既存の資料を見ると、共通語訳が「N \emptyset 」であることもある。富山市方言の「 \emptyset 」「ア」のような情報構造によらず用いられる形式について、「は」と訳された例を除外するのが適切かという問題もある。また、「Nガワ」(主格+提題)のような接続を許す方言と許さない方言とを比べられないことにもなる。

ここでは、格と情報構造の標示を互いに独立のものとし、韻律情報、コンテキストは考慮せず、名詞句のとり形により表1のように類別する³。形式とその適格性は富山市方言の場合。

表1. 主語・目的語の格・情報構造標示

		主語	目的語
格標示+	情報構造標示+	ダケガ、ナンカガ、 *ガモ、*ガチャ、等	ダケオ、ナンカオ、?オ モ、*オチャ、等
+	-	ガ、ノ (連体節のみ)	オ
-	+	ワ、チャ、モ、シカ、ナンカ、ダケ、等	
-	-	\emptyset	

「 \emptyset 」(無助詞名詞句)は、格(述語との意味関係)も情報構造も音形として積極的に標示しないという意味で[格標示-、情報構造標示-]とする。

富山市方言のアは、主語に用いられるほか、主題名詞句に用いられうる。いったん上の分類には位置づけずに扱う。

「主語」「目的語」は基本的に意味役割により認定し、「主語」は動作・変化・状態の〈主体〉、「目的語」は動作・(働きかけ)の〈対象〉とする。意味役割と格関係に方言差が予想される次のような例は定量的な把握の際には対象外とし、特徴が見られる場合には個別に言及する。

- ・「～たい」「好きだ」などの感情述語における〈感情の対象〉
- ・二重主語文における大主語。例)「象は鼻が長い」
- ・使役、受身、可能などヴォイスによる格交替の変化を伴う文
- ・述語が省略されたり流れた文

また、同種の複数の述語の項を兼ねる場合、重複して数えないが、異種の複数の述語の項を兼ねる場合、重複して数える。例えば「花子が来て、こう言った」の「花子が」は「自動詞主語」の1例として数え、「花子が来て、窓を開けた」の「花子が」は「自動詞主語」の1例、「他動詞主語」の1例としてそれぞれ数えた。

² 小西(2016: 105)の表3.9「藤木資料での対格標示」も同様。

³ ただし[格標示+]は[情報構造標示+-]の区別をせずにまとめて扱う。

2.1 他動詞文の目的語

表 2. 富山市方言（藤木資料）における目的語の標示

				内、隣接	隣接率
格+	オ	2	1.8%	2	100.0%
格- 情+	チャ・ワ・ノコトア	5	4.6%	2	40.0%
	他の副助詞	18	16.5%	15	83.3%
格- 情-	ø	83	76.1%	72	86.7%
	ア	1	0.9%	1	100.0%
計		109	100.0%	92	84.4%

表 3. 東京・大阪・広島方言における目的語の標示

		東京		大阪		広島	
格+	オ、融合形	53	47.7%	35	22.6%	176	77.2%
格- 情+	副助詞	13	11.7%	46	29.7%	27	11.8%
格- 情-	ø	45	40.5%	74	47.7%	25	11.0%
計		111	100.0%	155	100.0%	228	100.0%

表 2 の「隣接」は当該名詞句が述語の直前に位置することを言う。

表 3 は、『日本のふるさとことば集成』（国立国語研究所 2002・2004）の東京都台東区・大阪市・広島市を対象としたもので、小西(2015a)で示した表を、表 1 の分類に従い改めたものである。「オ、融合形」には「ハナビュー（花火を）」などのほか「オフロー（お風呂を）」などの長音形も含めている。

富山市方言において、オは 2%未満で非常に少なく、ø が 80%近くで多い。東京・大阪と比べても ø の率が高い。広島は ø の割合がこれら 3 方言に比べて著しく低く、オなど [格+] の割合が高い。木部(2015)は本稿での [格-、情+] にあたるものを対象外としているが、[格+] と ø の比については矛盾しない結果となっている。

例をあげる。富山市の ø のうち、前提句（主題）と解せるのは(19)の 1 例のみである。また、アの 1 例(20)は文脈から前提句とも解しがたい、疑問例。目的語を主題とする文では、チャ・ワ・ノコトアといった有形の提題形式を用い、ø・アは避けられると言える。東京・大阪・広島でも前提句と解される ø は 3、8、0 例でそれほど多くない⁴。

(14) リョーホーニ シト ø モットッテサ ソイツオ トブカ° ダネカイネ。(両方に人が持っていてさ、そいつを飛ぶんだよね。)

(15) デモ ウチデチャ ソイカ° チャ モー イワレンカ°。(でも、家ではそのようなことは、決して言えないの。)

(16) ゴハンノ ヨーイノコトア ナン ワシトコノ バーチャン ø シトラレナンダ。(食事の用意については、いや、私のばあちゃんは、しておられなかった。)

⁴ 広島では主題名詞句の ø 標示も避けられるようである。格標示の ø が少ないというだけでなく、無助詞名詞句を嫌うという理解をすべきではないかと思われる。

- (17) マイニチ ソンナ コンブデンプバッカ カケテ タベトツタ。(毎日そんな昆布でんぶばかりを(ご飯に)かけて食べていた。)
- (18) ベントカ° ラニ ゴハン ø コーシテ エレテーネ (弁当がらにご飯をこうして入れてね、)
- (19) (他の話者が子供のころの遊びとして「釘刺し」をあげたのを受けて) クキ° サシ ø ヨー ヤッタワ。(釘刺しはよくやったよ。)
- (20) (農作業のために小作を使ったり臨時に人を雇うという話題) イヤー Kワ リンジダチャ。リンジニ アッデ ヒトア イレテネ (いや、K(屋号)は臨時だよ。臨時に、あれで、人を入れてね、)

述語との隣接性を見ると、提題機能を持つ「チャ・ワ・ノコトア」を除き、いずれの形も80%以上が述語の直前に位置している。広島市方言では、格標示+の場合に隣接率が約60%、øは約80%、ワ以外の副助詞も約70%と、述語に隣接する環境で格標示-の名詞句が表れやすい⁵。目的語全体の隣接率を見ると、富山市が80%強、広島市が60%強である。目的語のø標示が一般的な富山市方言では、目的語全体が述語の直前の環境に偏り、広島市では述語から離れた位置でも表れやすい傾向がある。

2.2 自動詞文、形容詞・名詞文の主語

表4. 富山市方言(藤木資料)における自動詞文主語の標示

		内、隣接			
格+	カ°	4	5.1%	3	75.0%
	ノ(連体節)	2	2.5%	2	100.0%
格- 情+	チャ・ワ・ノコトア	5	6.3%	0	0.0%
	他の副助	10	12.7%	7	70.0%
格- 情+	ø	29	36.7%	23	79.3%
	ア	29	36.7%	18	62.1%
	計	79	100.0%	53	67.1%

注) ø、アの内、前提句と解せる例はそれぞれ9例

表5. 富山市方言(藤木資料)における形容詞・名詞文主語の標示

		内、隣接			
格+	カ°	11	13.1%	9	81.8%
	ノ(連体節)	2	2.4%	2	100.0%
格- 情+	チャ・ワ・ノコトア	21	25.0%	13	61.9%
	他の副助	7	8.3%	4	57.1%
格- 情+	ø	17	20.2%	14	82.4%
	ア	26	31.0%	17	65.4%
	計	84	100.0%	59	70.6%

注) ø、アの内、前提句と解せる例はそれぞれ11例、21例

自動詞文において、カ°・ノは合計で10%未満。目的語のオよりは格標示+率が多い。

⁵ 富山市方言には述語が流れたので表2に含めていないオ2例もある。富山市方言の場合、オが述語非隣接の環境で現れやすいという傾向がある。

ø、アはそれぞれ 40%弱。

形容詞・名詞文では、カ°が増え約 15%、提題形式チャ等も 27%に増える。ø・アのうち前提句（主題）と解せる例の占める率も自動詞文より高い。状態性述語文で主語が前提句となりやすいのは一般的なことと言える。

また、自動詞文のカ° 4 例中 3 例は存在動詞「アル」。すなわちカ° は状態性述語に偏るのだが、理由はよく分からない。

- (21) ヒマタヨースイカ° ナイサカイニ ホントノ ソノ ドテモ フチニ エーヨースイカ° アッタダケデ。(日俣用水がないから、本当の、その、土手も、淵に、ええ、用水があっただけで。)
- (22) オトコチャ ヤッパシ オクテブトリカ° オーイカ° ダネ。(男というのはやはり奥手太りが多いんだね。)
- (23) アッデ ナカノ イカッタ シトナン。(あれで仲の良かった人なの。)
- (24) Tサンモ シナレナンダケ。(Tさんも亡くならなかった?)
- (25) コトシ コー アメ ø フラントコ ミットイネ。(今年、こう雨が降らないところを見るとね。)
- (26) ワシラ ø ビンボダッタカラネ。(私達は貧乏だったからね。)
- (27) トッシャ イッテ シモタラ ナモ ドコノ スマニ オラレルヤラッテ ユーテ (年がいつてしまったら、もう、どこの隅におられるやらって言って)
- (28) ナーン Mサンナネ ガッコ イットアエットキ オーキカッタカ°。(いいや、松田さんはね、学校に行っておられる時は大きかったの。)

述語との隣接性を見ると、øの隣接率はカ°と同程度で、øの出現にこの要因が関与しているとは言えない。広島市方言も自動詞主語、形容詞・名詞文主語全体の隣接率が 60%代で差がない。なお、広島市方言では主語名詞句の ø はほとんど例がない。

2.3 他動詞文の主語

表 6. 富山市方言（藤木資料）における他動詞文主語の標示

		内、隣接			
格+	カ°	0	0.0%		
	ノ（連体節）	0	0.0%		
格- 情+	チャ・ワ・ノコトア	3	15.8%	0	0.0%
	他の副助	0	0.0%		
格- 情+	ø	9	47.4%	4	44.4%
	ア	7	36.8%	1	14.3%
	計	19	100.0%	5	26.3%

注) ø、アの内、前提句と解せる例はそれぞれ 6 例、4 例

他動詞文の主語は、明示されないほうが圧倒的に多い。ただし、他動詞文の主語が明示されない傾向は、広島市方言も同様。

この資料で、カ°・ノの例は得られなかった。その分、自動詞文の主語に比べて提題形式と \emptyset の割合が増えている。 \emptyset ・アのうち、前提句と解せる例の割合も高い。談話のテーマが「昔の遊び・生活」であることから、動詞文の主語が1人称や総称に偏り、述語焦点構造が増えることは理解できるが、自動詞文と他動詞文で差が現れる理由は考えにくい。

- (29) H ハンナ ター ウェラレンニャ コサクチャ ター ウェラレンカ° チネ。(H (地主)さんが田をお植えにしなければ、小作は田を植えられないのだよね。)
- (30) ワタシノコタ サ ムカシカラ オル ウチジャ ナカッタカラ ゼンゼン シラン シランモンダカラ アレダッタレドー。(私について言えば、そりゃ、昔からいるうちじゃなかったから、全然しらない、知らないものだから、あれだったけど。)
- (31) サ ヨメハンドモデモ アンタ ヤッパリ オラッチャ \emptyset マ マチカラ ヨメハン \emptyset モロトツサカイニ (それは、嫁さんたちであっても、あなた、やはり私たちは、まあ、町から嫁さんをもっているから。)
- (32) マー ムカシ サムラ サムライドモアサ ナンシタ シロトリ \emptyset ヤットツタケネ (まあ、昔、侍達がさ、城取をやっていたから、)

2.4 談話資料の調査結果のまとめ

格の機能から考えると、格標示+の出現率は、他動詞主語>自動詞(形容詞・名詞)主語・他動詞目的語となると予測されるが、少なくともこの方言のこの資料ではそのようなことは言えず、他動詞述語文における主語は省略されることが非常に多いことが分かった。このことは、他動詞文において、「[名詞句 \emptyset 」が現れればそれは目的語である」という解釈を助け、目的語の \emptyset 標示をさらに促すと思われる。

また、格標示+率が高い広島市方言に比べ、目的語全体の述語隣接率が高く、述語からの相対的な語順が格助詞の代替機能を担っているといえる。

状態性述語の主語においてカ°が表れやすい傾向がうかがえたが、これは述語の性質と情報構造に相関があるためと思われる。談話の話題にもよるだろう。主語標示の定量的な把握については他の資料でも確認したほうがよい。

3. 格と情報構造

ここでは、話者(筆者=1973年生まれ、および、1945年生まれ男性1名)が例文の文法的適格性を判断することにより、記述する。

3.1 \emptyset

1節3)で述べたように、共通語では、主語・目的語、および着点を表す無生名詞句の \emptyset 標示は、述語の直前か、前提句(主題)の場合にしか許容されないが、富山市方言にはその制約がない。

- (33) A: [ト]ーシタカ°。(どうしたの?)
 B: サ[ラ \emptyset ワレタカ°。/ サ[ラ \emptyset ワ[レタカ°。(皿 {が/ \emptyset } 割れたんだ。)

[自動詞文、文焦点]

(34) A: ナ[ニ \emptyset] ワレタカ°。(何が割れたの?)

B: サ[ラ \emptyset] ワレタカ°。(皿 {が/ \emptyset } 割れたんだ。)[自動詞文、S 焦点]

(35) A: ア[ノサラ \emptyset] [ド]ーシタカ°。(あの皿 {は/ \emptyset } どうしたの?)

B: ア[ノサラ \emptyset] ワ[レタカ°]。(あの皿 {は/ \emptyset } 割れたんだ。)

[自動詞文、述語焦点]

(36) A: [ド]ーシタカ°。(どうしたの?)

B: ハ[ナ]コ \emptyset サ[ラ \emptyset] ワッタカ°。(花子 {が/* \emptyset } 皿 {を/ \emptyset } 割ったんだ。)

[他動詞文、文焦点]

(37) A: a. ダ[レ \emptyset] コ[ノサラ \emptyset] ワッタカ°。(誰 {が/* \emptyset } この皿 {を/ \emptyset } 割ったの?)

b. コ[ノサラ \emptyset] ダ[レ \emptyset] ワッタカ°。(この皿 {は/ \emptyset } 誰 {が/ \emptyset } 割ったの?)

B: ハ[ナ]コ \emptyset コノサラ \emptyset ワッタカ°。

(花子 {が/* \emptyset } この皿 {を/ \emptyset } 割ったんだ。)[他動詞文、A 焦点]

(38) A: ハ[ナ]コ \emptyset ナ[ニ \emptyset] ワッタカ°。(花子 {は/ \emptyset } 何 {を/ \emptyset } 割ったの?)

B: ハ[ナ]コ \emptyset サ[ラ \emptyset] ワッタカ°。(花子 {は/ \emptyset } 皿 {を/ \emptyset } 割ったんだ。)

[他動詞文、O 焦点]

(39) A: [ド]ーシタカ°。(どうしたの?)

B: a. ハ[ナ]コ \emptyset ア[メリカ \emptyset] イクカ°]ヤト。

(花子 {が/ \emptyset } アメリカ {に/ \emptyset } 行くだって。)

b. ア[メリカ \emptyset] ハ[ナ]コ \emptyset イクカ°]ヤト

(アメリカ {に/?? \emptyset } 花子 {が/ \emptyset } 行くだって。)

[自動詞文・着点、文焦点]

(40) a. ダ[レ \emptyset] ア[メリカ \emptyset] イクカ°。(誰 {が/* \emptyset } アメリカ {に/ \emptyset } 行くの?)

b. ア[メリカ \emptyset] ダ[レ \emptyset] イクカ°。(アメリカ {に/ \emptyset } 誰 {が/ \emptyset } 行くの?)

[自動詞文・着点、S 焦点]

(41) a. ハ[ナ]コ \emptyset ド[コ \emptyset] イクカ°。(花子 {は/ \emptyset } どこ {に/ \emptyset } 行くの?)

b. ド[コ \emptyset] ハ[ナ]コ \emptyset イクカ°。(どこ {に/* \emptyset } 花子 {は/ \emptyset } 行くの?)

[自動詞文・着点、着点焦点]

共通語では、上述の制約があるため、「花子 \emptyset 皿 \emptyset 割った」のような他動詞文の主語の \emptyset 標示は、「花子がどうしたの?」という文脈では可、「どうしたの?」「誰が皿を割ったの?」という文脈では不可。なお、前提句(主題)であれば、他の名詞句も \emptyset になりうる。

(42) a. 山田君がきのうあの子 {に/* \emptyset } 電話してたよ。

- b. あの子 {に/* \emptyset }、きのう山田君が電話してたよ。(丹羽 1989)
- (43) a. 太郎がよくこのコート {で/* \emptyset } 練習してたよ。
 b. このコート {で/ \emptyset } 太郎がよく練習してたよ。(同)

こうした \emptyset の分布から、非前提句で述語直前の \emptyset と、前提句の \emptyset は異質で、前者はガ格・ヲ格・ニ格の変異と認めたとしても、後者は、述語の項として付与された格とは言えず、情報構造(主題)を表す、「は」とは別の一形態とみなせる⁶。

富山市方言では、主語・目的語、および着点を表す無生の名詞句の \emptyset は、述語との隣接性や情報構造によらず適格となる。他動詞文の場合、「どうしたの?」「誰が皿を割ったの?」「花子がどうしたの?」いずれの文脈でも、離散音連続としては「ハナコ \emptyset サラ \emptyset ワッタ」が適格で、情報構造は韻律(句頭の上昇、ポーズなどのプロミネンス)により示される。この「ハナコ \emptyset 」「サラ \emptyset 」は、いずれの文脈でも、述語との意味関係を(広くはあるが)限定しており、それぞれ主格・対格(あるいは両方とも中立格)と認めてよいだろう。同様に、上の例の「NP \emptyset 」はそれぞれ主格・対格(ないし両者を同一の中立格)、および位(与)格の一変異と認めてよいだろう。

富山市方言でも、格としては \emptyset が許されない名詞句や、時を表す副詞的成分が、前提句(主題)となる場合に \emptyset となりうる。ただし、2節で見たように、主題の \emptyset は、運用上、主格名詞句か時を表す成分にほぼ限られ、下の(44)(45)のような例はほとんど現れない

- (44) コノコーエン \emptyset ムカシ ヨー アソнда。(この公園 \emptyset 、昔よく遊んだ。)
- (45) アノッサン \emptyset ハナコカ° マエ ツキオートツタカ° ヤト。
 (あの人 \emptyset 、花子が前に付き合っていたんだって。)
- (46) アノジブン \emptyset ヨー オソマデ ハタライトツタ。
 (あの頃 \emptyset 、よく遅くまで働いていた。)

3.2 ア

アは、自動詞主語、他動詞主語に用いられる場合は、基本的に情報構造によらない。

- (47) A: [ド]ーシタカ°。(どうしたの?)
 B: a. [ユ]ッキヤ フツテキタカ°。(雪が降ってきたんだ。)
 b. コ[ニ]ッサンナ [コンカ°。(小西さんが来ないんだ。)[自動詞文、文焦点]
- (48) A: ダ[レ \emptyset コンカ°。(誰が来ないの?)
 B: コ[ニ]ッサンナ コンカ°。(小西さんが来ないんだ。)[自動詞文、S焦点]
- (49) コ[ニ]ッサンナ キ[タ]ケ。(小西さんは来た?) [自動詞文、述語焦点]
- (50) A: [ド]ーシタカ°。(どうしたの?)

⁶ 丹羽(1989)や杉本(2000)もそう捉えていると理解できる。

B: a. ヤ[ネノ ヌ]ツキヤ イ[ヌコ° ヤ 0 ツブイタカ°。
(屋根の雪が犬小屋をつぶしたんだ。)

b. コ[ニ]ツサンナ サ[ラ 0 ワツタカ° (小西さんが皿を割ったんだ。)
[他動詞文、文焦点]

(51) コ[ニ]ツサンナ ナ[ンデ サラ 0 ワツタカ° (小西さんはなぜ皿を割ったの。)
[他動詞文、述語焦点]

アは、情報構造によらずに用いる主格の一形態と認めてよいと思われる。ただし、対応する意味役割は〈主体〉に限られ、〈感情の対象〉に用いにくい。

(52) オラ 0 {??ユツキヤ/ユキ 0} ミタイ。(私は雪が見たい。)

(53) アンタ 0 {??アノツサンナ/アノツサン 0} スキナンケ。
(あなたはあの人が好きなの?)

〈主体〉を表す場合でも本質的な属性を問う文脈では「チャ」が自然で、アは用いにくい。この場合は 0 もやや用いにくい。

(54) {ユキチャ/??ユツキヤ/?ユキ 0} ドコデ デキンカ° ケ。

(55) {コニツサンチャ/??コニツサンナ/?コニツサン 0} ドイ ヒトケ。

主語(主体)以外に、時を表す成分以外の前提句(主題)としても使われる。それ以外の前提句のアは、話者に判断を問うと、迷う。明らかに不適格とは言えないが、主体を表す名詞句が容易に適格と判断されるのとは異なる。2 節で見たように、談話上では主格名詞句と時名詞句以外の前提句としてはほとんど用いられず、回避されている。

(56) アノジブンナ ダイブ ユキ 0 オーカッタ。(あの時分はだいぶ雪が多かった。)

(57) a. ヤネノ ヌツキヤ 0 ダレ 0 オロイタンケ。(屋根の雪は誰がおろしたの?)

b. ヤネノ ヌツキヤ モー トケタンケ。(屋根の雪はもう溶けたの?)

(58) ??コノシンブンナ モー ヨンダ? (この新聞はもう読んだ?)

4. まとめと課題

3 節では格と情報構造標示との関係という観点から、富山市方言の 0 とアをどう理解すべきかを考察した。特にアが主語名詞句以外の「主題」を表す場合については、話者が適格性判断に迷い、限界があったが、2 節でみた談話資料の用例の定量的な把握によって話者の判断に依拠する定性的な記述の限界を補うことができた。ここでは、0 もアも、情報構造にかかわらずに一定の意味関係を表す場合に現れることから、前提句(主題)と解せる例も含めて格の一形態と扱えると主張した。

談話資料の調査では、他動詞文において主語が明示されることが非常に少ないことが分

かった。また、2 節で述べた格と情報構造の標示の問題のほか、同一の名詞句が複数の述語の項を兼ねることが少なくないなど、談話資料を定量的把握に用いることの難しさも改めて認識した。談話資料の限界とも言えるが、一方で、このような運用のしかたが、日本語の格標示の体系やその変化の特性と大きくかかわるものなのだろうとも感じる。

引用・参考文献

- 阿部貴人(2009)「対話における無助詞化の地域差—東京・大阪・津軽方言の対照から」『月刊言語』38巻4号
- 庵功雄(1998)「名詞句における助詞の有無と名詞句のステータスの相関についての一考察」『言語文化』35号
- 石田尊(1997)「ニ格相当の無助詞名詞句について」『筑波日本語研究』2号
- 金沢裕之(1986)「大阪弁における助詞の省略の動態—落語を材料として—」『計量国語学』15巻4号
- 金田純平(2007)「無助詞構文の方言間対照—備中方言と大阪方言を中心に—」『国際文化学』17号
- 木部暢子(2015)「対格助詞ゼロの地域差—方言コーパスの可能性—」『日本方言研究会第101回研究発表会発表原稿集』
- 国立国語研究所編(1989)『方言文法全国地図第1集』大蔵省印刷局
- 小西いずみ(2015a)「広島市方言の対格標示—談話資料による計量的把握—」『国語教育研究』56号
- 小西いずみ(2015b)「富山市方言におけるゼロ格」(国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」合同研究発表会「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」(2015.8.23)発表資料)
- 小西いずみ(2016)『富山県方言の文法』ひつじ書房
- 佐々木冠(2004)『水海道方言における格と文法関係』くろしお出版
- 佐々木冠(2006)「格」『シリーズ方言学2 方言の文法』岩波書店
- 杉本武(2000)「無助詞格のタイプについて」『文藝言語研究言語篇』38号
- 丹羽哲也(1989)「無助詞格の機能—主題と格と語順—」『国語国文』58巻10号
- 沼田善子(2001)「方向から着点へ、無助詞名詞句の展開—へ格及びニ格相当の名詞句の場合—」竹沢幸一・青木三郎(編)『空間表現と文法』くろしお出版
- 松田謙次郎(2000)「東京方言格助詞「を」の使用に関わる言語的要因の数量的検証」『国語学』51巻1号
- 丸山直子(1995)「話しことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19巻8号
- Shibatani, Masayoshi (1973) Semantics of Japanese causativization, *Foundations of Language*, 9.